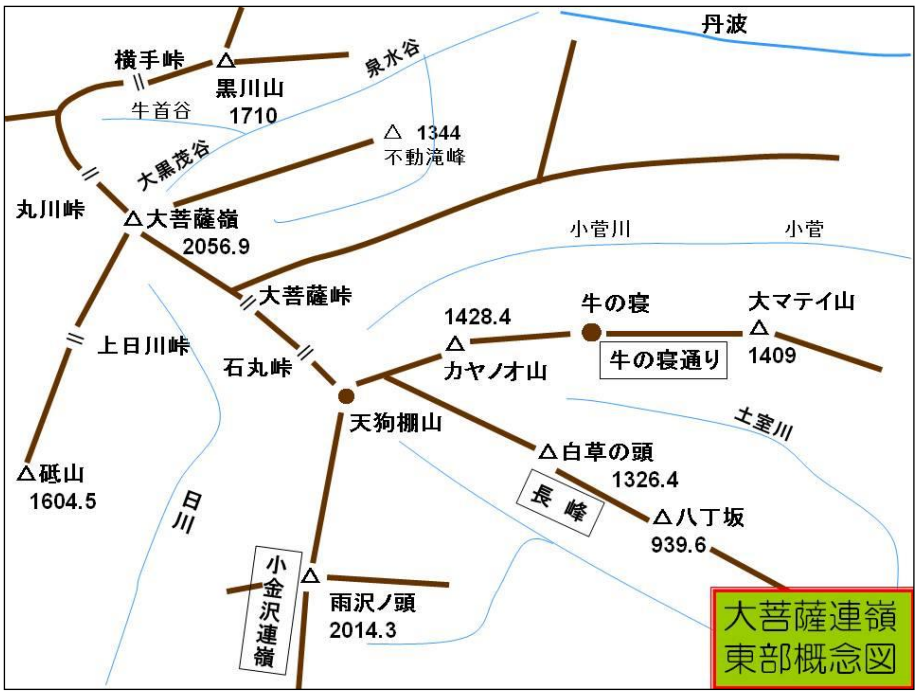
踏 み 跡 ＜ My mountains ＞

大菩薩	牛の寝通り縦走	No.039

牛の寝通りとは何とも奇妙な名前である。確かに、この稜線を南の長峰から見るとそんな感じがする。



天狗棚山からゆるやかな傾斜で下るあたりが首筋付近、カヤノオ山あたりが肩（前足の付け根）、牛の寝あたりのさしたる変化のないところが長々とした背中、最後に盛り上がる大マテイ山が腰骨。牛が座って（寝て）いるところを見たことがある人はすぐに想像がつくであろう。

この説明が正しいか否かわからないが、私自身この名前と実景とを見比べて充分に納得している。

昔、武田氏が甲斐を治めていた頃は、武蔵の国に接する場所であることから、秩父雁坂あたりと同様に重要な場所と言われていたらしい。

昭和 40 年 1 月 17 日

新宿発0時40分の臨時列車で満月の夜に出発。塩山着4時25分、暖をとりながら朝食。

6時のバスで裂石へ向かう予定だったが、20分も遅れて発車。なにがあったのかはわからない。

裂石には6時45分に到着、すぐに行動開始。今日のコースは前回と同じく上日川峠を経て石丸峠へ。

第一展望台からの南アルプスの眺めは前回よりも鮮やか。季節が進行したことによるのかもしれない。

上日川峠8時15分、陽光を浴びても-11 度という寒さ。南アルプスの眺めは、さらに白くたくましく厳冬の感を強くしている。石丸峠への分岐点まで進んで朝食、9時25分から10時15分迄遠望を楽しんだ。

石丸峠10時37分、雪は意外に多く、石丸峠から米代に下る北斜面では50～60cmほどあり、思わぬところで足を取られることがある。11時05分、米代で南に長峰を分けた後、カヤノオ山（1428.4m）あたりまではワカンが欲しいほどの積雪のところもあり、単調な冬の雑木林歩きの中にひとつ変化を与えてくれる。

薮の切れ間から見ると、長峰は一回り小さく短い。そしてその向こうに楢の木尾根の末端に座す泣坂三角点が1421mとは思えぬような貫禄で、黒く立っているのが見える。

牛の寝（1352m）を過ぎて、枯葉に埋まった細い道をしばらく進むと、牛の腰骨である大マテイ山（1409m）の肩に到着。13時25分。おそらく、この辺りからは奥秩父の飛龍山が望めたはずだが、ノートには何もメモが残っていなかった。下りに備えて軽食と休憩をとり14時10分出発。

ここから五月蝿いほどの枯葉の音楽を聴きながら、小菅村への下り。田元橋（638m）に15時15分に到着したが、氷川行の次のバスは17時11分。二時間近く待つのもいやなので、いくらかバスの本数が多いと思われる深山橋まで歩くことにした。歩き始めたら、後から来たトヨタコロナが丹波へ行くからと言って乗せてくれた。

昭和初期（この頃、青梅線はまだ二俣尾までしか走っていなかった）、小菅は都留の四寒村のひとつに数えられ、「二度と行くまい西原（さいはら）小菅　女が木を伐る茅を刈る」と里謡に唄われたそうだ。

その頃に比べればずっと開けてきたが、それでもまだ、県庁のある甲府へ行くのには片道でも丸一日かかる。
ところが、交通機関は大都会から延びてくるため、東京へは４時間程度で行くことができる。
「東京都にしてくれ」という陳情が再三行われたことを聞いたことがある。
車を運転する中年の男もやはりこんなことを言っていた。（東京の言葉に翻訳すると）
「ここは山梨だけど東京の方が近い。たいした農作物も取れず、温泉が湧くわけでもない。おまけに若い者は皆東京へ出てしまい帰ってこない。知事さんは‘富める山梨‘なんて言っているけど、とんでもない」
おかげで、深山橋に15時35分に着き15時50分のバスに乗ることができた。（バス代70円）
氷川着16時25分、かなり時間を前倒しすることができた。17時発の電車に乗り、立川から列車で、新宿着19時10分とスムースに帰ることができた。

以上

●後日譚
西暦2000年代になって、多摩川源流の秘境と言われていた丹波・小菅にも道路が整備されて温泉が掘られて、道の駅ができた。都会の人が立ち寄る観光地となってきたが、将来これが新たな問題点や課題の種とならないとも限らない。
また観光客の他に、移住者も増えているということだが、社会環境の変化に応じて今後どんな展開になるのだろうか。
●大マテイ山
道に迷いやすい山「大マドイ山」が起源で、オオマドイ→オオマトイ→オオマテイと変形したと言われている。

（修正・更新：2023年10月）